

Hello

2002

9

No.228

friends

KANAGAWA
INTERNATIONAL
ASSOCIATION
NEWSLETTER

神奈川県国際交流協会は、ことし創立25周年です。

(財)神奈川県国際交流協会 〒247-0007 横浜市栄区小菅ヶ谷1-2-1 神奈川県立地球市民かながわプラザ あーさ 35c 1階 045-896-2626



.....
もしもあなたが
空爆や襲撃や
地雷による殺戮や
武装集団のレイプや拉致に
おびえていなければ
そうではない20人より
恵まれています
.....
.....
.....

もしもたくさんのわたし・たちが
この村を愛することを知ったなら
まだ間にあいます
人びとを引き裂いている非道な力から
この村を救えます
きっと

(『世界がもし100人の村だったら』
池田香代子再話 C.ダグラス・ラミス対訳 マガジンハウス社刊 より)

2002年4月、パレスチナにて(写真提供:日本国際ボランティアセンター)

特集 「9.11」から1年 - 世界で今、何が起きているのか

～ マス・メディアとは違った角度から「事実」に近づく方法 ～

昨年9月11日、アメリカで起きた事件は、テレビを通じて世界中の人々が見守る中、3000人もの人々の命が一瞬にして奪われるという、前代未聞の出来事でした。

その後、「対テロ」を掲げた国際協調の動き、アメリカ各地で起きた炭疽菌事件、アフガニスタンへの空爆、日本の自衛隊の派遣、タリバン政権の崩壊とアフガニスタン暫定政権の発足、日本近海での「不審船」騒ぎ、元・国連難民高等弁務官の緒方貞子さんが議長を務めたアフガニスタン復興支援国際会議、プッシュ大統領の「悪の枢軸発言」、イスラエル軍によるパレスチナ自治区への侵攻、インド - パキスタン国境における軍事的緊張、カルザイ氏のアフガニスタン大統領就任と副大統領の暗殺事件、日本の「有事法制」を巡る論議…。1年足らずの間に、ずいぶんいろいろな事件が起き、さまざまな情報がとびかいました。

しかし、テレビや新聞を通じて沢山の情報を得ていながら、何か物足りない、自分が求めているものは、どこか違うところにあるんじゃないだろうかという、一種の不安のようなものを感じたことはありませんか。

今回の特集では、確かな“手応え”を得るために、テレビや新聞などのマス・メディアが必ずしも十分に伝えない「事実」にアプローチする方法について考えます。



アフガニスタンにて(写真：桑山紀彦さん)

インターネットを使って



今回の事件に関連して、研究者、ジャーナリスト、NGOなど、多くの人たちが自らのホームページで、自分たちが見聞きしてきたことを知らせ、問題について語っているが、戦争と平和について考える意見交換の場として特に有名になったのが「CHANCE! 平和を創る人々のネットワーク」というグループのメーリング・リスト(以下、ML)だ。多い時には約1000人もの人たちが登録し、「9.11」以降のさまざまな出来事、問題について意見が交わされた。このMLでのやりとりは登録者以外にも公開されており、ホームページ(注1)から簡単に見ることができるので、リストに登録せずに読んでいただけの人を含めると、その数はもっと多くなる。街頭で平和を訴える「ピース・ウォーク」など、ここでの意見交換から生まれ、全国に広がった活動もある。ちなみに、「CHANCE!」という団体名は、ジョン・レノンの歌『Give Peace a Chance!』(平和を我らに)からとったものだそうだ。9月11日の事件を、改めて平和について考える“チャンス”にしようという思いが込められているという。

「CHANCE! 東京」事務局の海南友子さんにお話をうかがった。

「CHANCE! のMLは、9月11日の事件の後、小林一朗というサイエンス・ライターが、友人でA SEED JAPANという環境問題に関わるNGOをやっている、羽仁カントに一通のメールを送ったのがきっかけで始まりました。そのメールには、『テロ』についてというよりは、もっと大きなもの、『私たちのライフ・スタイルは、今のままでいいのだろうか』といったような問題意識が綴られていました。また、マスコミを通じて伝えられる情報が、どこか、自分の

求めているものとは違うという意識もあったようです。それが、そこに書かれていることに共感した人たちの手で、ものすごい勢いで転送されていったんです。そのうち、MLを立ち上げようという話になって、転送されるメールの最後にMLへの登録方法を記したら、わずか2週間くらいの間に、数百人の人が登録したんです。」

昨年9月から10月にかけて、CHANCE! のMLには、毎日約200通もの投書があったという。自分のパソコンを使って、何かのMLに参加している人ならお分かりかと思うが、これは、たいへんな量だ。全部のメールにざっと目を通して削除していくだけで、優に2時間はかかるのではないだろうか。「それを、面倒くさがってやめたりせずに、1000人の人がずっと見ていたわけです。」

その理由を、海南さんは、次のように分析している。

「MLでの話し合いに参加することで、『自分は一じゃない』という気持ちになれたからだと思います。身近な友達に話してみても、期待したような反応が返ってこない。でも、自分と同じ思いを持っている人たちが、実は、こんなに大勢いるんだってことを確認できたんです。」

そこでやりとりされたメールの内容は、どのようなものだったのだろうか。

「最初の頃は、アメリカで起きた事件にショックを受けて、『悲しい...』とか、『どうしたらいいんだろう...』というものが多かったんです。それが、テロ特措法だとか、次第に具体的な問題が話題になるようになって、『私たちにも何か、できることがないだろうか』と、いろいろなアイデアが生まれるようになっていきました。」

注1

CHANCE! のホームページ

<http://www.give-peace-a-chance.jp/index.shtml>

住所：〒160-0022

東京都新宿区新宿5-4-23

10月27日(日) 10:00-12:00
CHANCE! のみなさんがやって来ます。

(P.5・地球市民養成講座のお知らせ参照)



パレスチナにて(写真：日本国際ボランティアセンター)

いわば“この指止まれ”方式で、いろいろなプロジェクトが生まれていったようだ。全国各地に広まった「ピース・ウォーク」という活動は、CHANCE! のMLから生まれた代表的な活動の一つだ。労働組合などが行ってきた従来のスタイルのデモ行進ではなく、今まで政治に無関心だった若者も気軽に参加できる、楽しいアピールの方法として、繁華街をにぎやかに歩くというやり方が定着した。第1回のピース・ウォークが東京・渋谷で実施されたのは、9月23日だったというから、アメリカで事件が起きてから12日目、MLが立ち上がってからわずか1週間ほどで、具体的な行動に結びついたわけだ。

胸に付けたリボンで平和を祈る気持ちを表す「イエロー・リボン」という運動も、一人の若いOLのアイデアから生まれたものだそうだ。最初のピース・ウォークの時には既に沢山のリボンが用意され、参加者に配られたという。

「私自身、それまで環境問題には関心があつたけれど、安全保障みたいなことは、難しいし、避けていたところがあったんです。でも、『9.11』をきっかけに、何かせずにはいられなくなって。だから、私たちのような普通の人たち、政治に無関心な人たち、特に若い人たちにもメッセージを伝える、新しいやり方で平和を訴えるのが、“CHANCE! 流”のやり方なんです」と海南さんは言う。CHANCE! の活動に係わる中心メンバーは、皆一様に、この“CHANCE! 流”に対する強い思い入れがあるように感じられた。

事務局に集まったメンバーは、20代後半から30代の若者が多いというが、自分のところに転送されてきたメールを通じてこの活動を知り、いてもたってもいられない気持ちでそこに駆けつけた人たちが。

「今でこそ、こんなに仲良くしてますけど、最初は知らない人ばかり。それこそ、『あなた、誰?』って感じてしたよ」と、海南さんは仲間と笑う。

CHANCE! の例は、インターネットが、人と人、思いと思いを結びつけ、ものすごいスピードで具体的な活動を生み出していった、21世紀型の新しい市民運動の始まりだと言えるかもしれない。

テレビ電話を使って



今年6月、衛星回線を利用したテレビ電話を使い、アフガニスタンと日本の高校を結ぶという、とてもユニークな試みが行われた。

日本側から参加したのは、神奈川県立川崎南高校（川崎市）と東金沢高校（横浜市）の生徒と教師。NGO「アフガン対話プロジェクト・サポートチーム」の小川直美さんが日本側のコーディネーターとなり、テレビ番組の取材でアフガニスタンに滞在していたビデオ・ジャーナリスト集団「DNA」のメンバーによってカブール市内の高校から映像が送られてきた。

川崎南高校を訪ね、実際にその様子を見せていただいた。

当日、コンピュータ・ルームに集まった生徒は3人。担当の風巻 浩先生とともに、自己紹介の仕方や質問事項を確認しながら、電話回線が繋がる瞬間を待った。そして、予定の時間を少し過ぎて、いよいよ現地の映像が届き、向こうの教室に集まった大勢の生徒たちの顔が大きなスクリーンに映し出されると、参加者の間に思わず緊張が走った。

時間にして15分ほどだろうか、学校での授業科目や放課後の過ごし方などについて、互いのやりとりが行われた後、最後に、向こうの先生から、生徒の制服に関して質問があった。

それに対して風巻先生が、「女の子はおしゃれなので、なかなか先生の言うことを聞いてくれません」と答えると、参加していた日本側の女子生徒たちが笑ったのだが、次の瞬間、電話回線を通して、向こうからもみんなの笑い声が聞こえてきた。

つまり、この時、数千キロの距離を超えて、アフガニスタンと日本の高校生たちの間で「笑い」が共有されたのだ。出来あいの「教材」を使った授業やテレビのニュースでは絶対に得られない感覚だ。風巻先生も、「GNP、乳幼児死亡率、戦争と「平和」...。まったく隔絶した2つの国の若者

たちが、笑いで「同じ時間を共有」できたこと、これが、今回の醍醐味でした」と話してくれた。授業の後、生徒達に思わず「やったね!」と言ったそうだ。

話の内容は他愛のないことかもしれないが、相手と同じことを「可笑しい」と感じられることは、どんな学習より確かな「共感」につながるのではないだろうか。

もう一つの会場となった東金沢高校では、向こうの生徒の最初の質問が、『もし、あなた方が私たちの状況に置かれたらどうしますか』という、非常にシリアスなものだったそうだ。

授業を担当した小野行雄先生は、「あの質問を受けて、『そんなこと、考えたこともないから、分からない』と答えた生徒は、その後、ずっと悩んでました。翌日もずっと悩んで、社会科の先生に相談に行ったり」と、後日談を話してくれた。

そして彼女は、「あれについて、もう一度、答えたい」と、翌週の対話の時に「私が、分からないと答えたのは、関心がないという意味ではなくて、想像はしているんだけど、実感としては分からないという意味です」と説明したそうだ。それでも、なお、彼女は今も考え続けているという。

また、「なぜ、日本は今まで支援してくれなかったのか?」と聞かれて「政治家が悪かったんだと思う」と答えた生徒は、あれでよかったのだろうか、ちょっとおかしかったんじゃないかと悩み、「支援してくれますか?」と聞かれて「できる限りのことはしたい」と答えた生徒は、「言っちゃったから、何かしなければ」と、文化祭でモノを売り、収益を援助に充てようといった計画を練っているそうだ。

小野先生は、「我々が働きかけるよりも早く、自発的に動き出しています。もしかしたら、彼らにとって、面と向かって話した、初めての外国人だったのかもしれない。だから、なおさらインパクトが大きかったんでしょね」と話してくれた。

このような試みは、これからの新しいスタイルの「平和教育」だと言えるかもしれない。が、ちょっと気になることもある。

川崎南高校で行った際、アフガニスタン側から出た質問に、「この対話プロジェクトのねらいは何ですか? あなたたちは、なぜ、わたしたちと話がしたいのですか?」というものがあつた。似たような質問は、東金沢



高校の方でも出たと聞いた。

この質問は、考えようによっては、「こんなことをして、何になるのか?」「あなたたちは、何をしてくれるのか?」話を聞くだけでおしまいなのか? というふうにも聞こえる。これは、この日参加した高校生に対してというよりも、こうしたことを仕掛けている、大人に対しての問いかけなのかもしれない。

写真:川崎南高校で行われた対話

映画 『プロミス』



パレスチナと聞いて分かる事と言ってもTVのニュースで時折テロがあったとか、軍事衝突があったという出来事を見る程度だ。誰がどんな生活をしているかなんて考えることも無かった。勧められて偶々観たこの映画の中の子ども達がいきいきしているのに驚いた。お茶目だったり、スポーツ好きだったり、みんなとても元気だ。100メートル競争で負けて悔しくて泣いたりもする。しかしそんな屈託の無い子がふと見せる悲しみの涙、怒り、憎しみの表情。イスラエル・パレスチナ双方の子どもが「ここは元々自分達の土地だ」と言って譲らない。だが、会話の中から「(子ども同士でも)対話が必要だ」との考えが生まれ、検問所を越えての対面が実現する。大人による現実の平和はまだ先のことが見えないが、映画の子ども達の姿には希望が感じられる。

9月15日(日) 13:00 ~
あーさ 35歳 にて上映
(入場無料)
予約受付中(定員130名)
問合せ・申込先:
045-896-2964



「現場」を訪ねて



とにかく、自分の目で「現場」を見てみたいと、NGOが企画したツアーに参加した人たちもいる。

今年4月から5月にかけて、2回にわたってアラブイスラム文化協会が実施した、「アフガン難民キャンプ・スタディツアー」に参加した人たち、26人だ。女子中学生から60代の男性まで、世代も職業もさまざまな人たちが集まった。

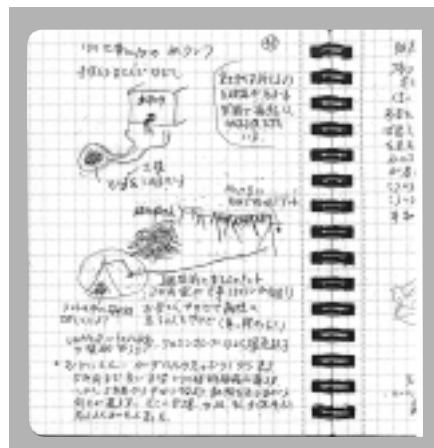
7月に東京で開かれた報告会で、参加者から話を聞いた。

「パキスタンのペシャワール近郊の難民キャンプに行きました。僕らが歩いていると、すぐに子どもたちが集まってきたんですが、握手をすると手が細く、握力がないのを感じました。日本のジャンケンを教えたりして遊びましたが、これから先、彼らがどうなるのか、気になりました」（原文次郎さん）

「トルクメニスタン人のキャンプでは、人々が絨毯を織って収入を得ていたそうですが、昨年9月以降、注文がなくなって収入が途絶えたままだと聞きました」「2~3メートル四方のテントに何人も住んでいます。地面を30センチくらい掘って、そこに敷物を敷いているのですが、雪解け水で水浸しになっていました」「ブルカの中に赤ちゃんを抱いている女性から、『朝から何も食べていない』と訴えられました。夫は働いているが、新政府から給与が支給されていないということでした」（古橋和子さん）

「アフガニスタン国内にある、スピンドルダックというキャンプでは、カナダから送られてきた衣類が、きちんと仕分けされ

ていないために、人々に配られず、放置されているのを見ました。要らなくなったものを投げ捨てるように与えるのではなく、手渡しで贈ることが大切だと感じました」（池田光司さん）



（写真：池田さんが現地とったメモより）

ツアーに参加した動機については、「アフガン難民への衣料援助の活動を手伝ったのをきっかけに、現地まで見に行きたいと思って」（中野由香さん）、「以前から、戦争を体感したいという欲求があったんです。人が死ぬ、人が生きるとはどういうことが、自分の目でしっかり見たいと思ったんです」（細井明美さん）など、人それぞれだが、中には、「ツアーに参加すると決めてから、『私が行って何になるんだろう』と悩みました」（池本英子さん、中野由香さん）という人たちもいた。中野さんの場合、「それは、いまだに自分にとっての

“宿題”」だという。

また、参加者の何人かは、今回の戦争における“日本の責任”を強く意識したようだ。「アフガニスタンの人から、『日本人は、ヒロシマ、ナガサキを経験していながら、なぜ、アメリカを支持するのか』と聞かれ、日本人として難民キャンプにいることが恥ずかしかった」（大学1年生の澤野美佳さん）という発言もあった。

ツアーの現地コーディネートを担当した、在日パキスタン人のクレーシ・ハールーンさんは、今回のツアーの企画意図を、次のように話してくれた。

「日本社会には、イスラームに関する情報が少ない。あっても西側から入ってきた情報ばかりで、直接の情報ではない」「9月11日以降、イスラーム教徒に対する偏見を感じる事が何度もありました。駅に向かって歩いていたら、後ろの方で『やばい、テロだ!』という声が聞こえたり、スカーフを被っている私の妻を見て、『タリバンだ』という人がいたり。あるパキスタン人が、民族衣装を着て地方へ行ったら、『タリバンが来た』と警察に通報した人がいて、パトカーが何台も集まって来たという話を聞いたこともあります」「いちばんの原因は、メディアの責任だと思います。本当の情報が伝えられていないと思う。だから私は、少しでも“本当の時間”をつくりたいと思ったんです」「去年の11月と今年の2月に現地に行った時、次から次へと子どもたちが死んでいく最悪の状況を見て、彼らのために、他のことをおいてでも働きたいと思ったんです。このツアーは、遊びのツアーではなく、一人一人が、自分にできることを始めるためのツアーです。」

報告会で発言した、どの参加者からも、「現場」を見た者として、他人事ではすまされないという気持ちが強く伝わってきた。実際、ツアーに参加した人たちが周囲に呼びかけ、現地の学校を支援するプロジェクトなどが既に始まっているという。

～取材を終えて～

今回、紹介したのは、マス・メディアとは少し違った角度から「事実」にアプローチする方法のほんの一例に過ぎない。この他にも、日本に住む外国人から話を聞く、NGOが開催する報告会などに参加する、映画やビデオを観るなど、いろいろな方法があるだろう。

例えば、アフガニスタンで10年以上にわたって、井戸掘りや医療の活動を続けているNGO、「ペシャワール会」代表の中村哲さんの言葉は、テレビや新聞ではなかなか見ることのできない現地の事情を、非常にリアルに伝えてくれた。北部同盟とアメリカ軍の攻撃を受けてタリバン勢力が撤退し、首都カブールが陥落した時、マスコミはこぞって、女性がブルカを脱ぎ、音楽を流して市民が喜んでいる様子を伝えたが、中村さんは、テレビ画面を通じて聞こえてくる言葉のほとんどが、タジク人やウズベク人の言葉であり、最も多いはずのパシュトゥン人の言葉が聞かれないということを指摘していた。タリバン勢力の中心がパシュトゥン人であったため、パシュトゥン人は皆、迫害を恐れてカブールから逃げ出しているのではないかというのだ。

また、昨年の秋以降、アフガニスタンやパレスチナの様子を伝えるいろいろな映画が公開されているし、NGOが制作したビデオにも、非常に興味深いものがある。「ビデオ塾」というグループの青野恵美子さんが制作した記録ビデオ『PEACE NOT WAR - 9.11直後のニューヨーク』では、事件直後、ニューヨークのユニオン・スクエアに集まった人々が、犠牲者の冥福を祈る様子や、1万2千人の平和デモ行進の様子などを見ることができる。

個人のような小さな単位から発信される情報は、時に間違いがあったり、一面的であったりするかもしれない。しかし、目まぐるしく動く世界の情勢は、マス・メディアが伝える情報だけでは読み解けなくなってきていることも確かだ。多少のリスクがあることを承知の上で、もうひとつのメディアを上手く使いこなすことを考えてみてはどうだろうか。

地球市民養成講座 Living on the Edge 「際」を生きるということ

何気なく読んでいる新聞、何気なく見ているテレビ、何気なく通り過ぎてゆく街角、何気なく会話を交わし合う恋人たち…。私たちの日常のそんな「何気なさ」のなかで、視界には入っているのに、見落とされているもの。この講座は、それと知らず私たちが「edge」/「際」に追いやってしまっているかもしれない事柄に、そして私たち自身が、私たちの中にありながら忘れがちな内なる「edge」/「際」に触れ、「edge」の側から私たちの日常を見つめ直し、「いま、ここ」で「平和」に生きる術を模索しようとする試みです。

第1回 「日本のなかのedge / 沖縄を生きる」

……………10月5日(土)午後2時から
喜久里康子さん(沖縄市民情報センター)
+ 上村英明さん(恵泉女学園大学)
「ちゅらさん」、「島唄」、「癒しのトロピカルアイランド」…。様々な形で表される日本のなかの「edge」沖縄/琉球。若い「在日沖縄人」の「声」を通して、私たちが気づいてこなかった「もうひとつの沖縄」を生きることの意味を学びます。

第2回 「環境のedgeを生きる」

……………10月12日(土)午後2時から
豊崎博光さん(写真家)
原子力爆弾の犠牲になった人びと、原子力発電の燃料に使われるウランを採掘する人びと、環境破壊によって「聖地」を奪われた人びと…。ラングラップ島で、ネバダで、ヒロシマで、「核」、「環境破壊」の「edge」に立たされている人びとを記録し続けてきた写真家の「声」と「写真」に耳をすまします。

第3回 「おんなを生きる・おとこを生きる」

……………10月19日(土)午後2時から
堀田碧さん(和光大学)
「愛してる」って言うけど、肝心のところで鈍感で、そんなときあなたをひどく遠い存在に感じてしまう。そんなとき私のなかで立ち現れる「edge」/「際」。「おんな」だから、「おとこ」だから悩むことって、けっこうある。それってなんで? 「おんなを生きる」「おとこを生きる」意味について、しなやかに楽しく学びながら考えます。

「平和・共生」協働事業決定

神奈川県国際交流協会では、「9月11日を『平和・共生の日』に!」と題して、協働事業の企画提案を募集し、次の2件を提案団体と協力して実施することになりました。

タイトル 対話の現場を創る

- アフガン高校生とのテレビ対話 -

提案団体 神奈川県高等学校教職員組合開発教育小委員会
(代表 永野 広務)

実施期間 2002年9月28日～2002年10月6日

内容 今年6月、衛生生を利用したテレビ電話を使って、アフガニスタンの高校生と対話を行った、川崎南高校(川崎市)と東金沢高校(横浜市)の生徒が、自分たちの高校の文化祭で、アフガニスタンの人々への支援のための講演会、民芸品の販売などを行います。

タイトル 異文化と共に生きる

- 異文化と共生するコミュニティ作り -

提案団体 ICUユネスコクラブ(代表 富田真由美)

実施期間 2002年4月8日～2002年12月31日

内容 「多文化共生」をテーマに、神奈川で暮らす留学生を対象とした意識調査を行い、その結果を報告書にまとめて大学や関係機関に配布し、よりよい環境づくりの提案を行います。

第4回 「at homeless を生きる」

……………10月20日(日)午後2時から
川崎水曜パトロールのみなさん
かたすみに そのおとこは たっている てらてらと あかびかりする ぶかぶかのがいとう そのしたにかさねられた なんまいものしゃつ……。彼らは誰なのでしょう?そして彼らを「襲撃」するのは誰なのでしょう?私たちの社会の根幹を問う問いがここにあります。

第5回 「際どい時代を戦争をしないで生きるために」

……………10月27日(日)午後2時から
平和を創る人々のネットワーク「CHANCE!」のみなさん
テロ事件、アフガン空爆以降、「なにかをしたい!」そう思った人々が、様々な意味で岐路に立つこの地で、「平和」を「創る」ために集いました。「時限ネットワーク」という新しい運動の担い手といっしょに、「これだけ多くの人が平和を望んでいるのに何で戦いが止まらないの?」という問いの答えを探ります。

第3回・第4回地球市民学習リーダーセミナー「まなびの工具箱」

第3回 「環境教育フィールドワーク～いたち川を散策する」

土木技術者として、20年以上も「いたち川」に関わり、また、市民の立場で、地域の小中学校の子どもたちに環境教育を実践している和久井さんに「いたち川」のこれまでの話を伺い、実際に川辺を案内してもらいます。運動靴でご参加ください。

日時: 10月26日(土) 13:30～16:00

場所: ㊟-㊟ 35㊟ 1階・ワークショップルーム集合
*14:30からいたち川散策開始(雨天はスライド上映)*現地解散の予定

講師: 和久井征治さん(キャリアコミュニケーション/横浜
市栄土木事務所職員/鮎川OTASUKE隊メンバー)

定員: 30名(申込者多数の場合は抽選)

申込締切: 10月11日(金)

第4回 「身近なモノから世界が見える」

「使い捨てカメラの授業」や「ハンバーガーの授業」など、「モノ」を起点としたユニークな学習活動の実践で有名な千葉保さんの模擬授業に参加します。学校の教員同士の「同僚性」が大切だと強調する千葉さんと一緒に「学校」のこと、「総合的な学習の時間」のことなど、いろいろ語り合ひましょう。

日時: 11月30日(土) 13:30～16:00

場所: ㊟-㊟ 35㊟ 1階・会議室
講師: 千葉 保さん(三浦市立南下浦小学校長)
主著: 『授業 日本はどこへ行く』
『学校にさわやかな風が吹く』など。

定員: 30名(申込者多数の場合は抽選)

申込締切: 11月15日(金)

地球市民養成講座・地球市民学習リーダーセミナー「まなびの工具箱」ともに

参加費: 無料 申込方法: 参加する回、氏名(ふりがな)、所属(学校名や団体名)、連絡先(電話、FAX、Eメール)をすべて明記して、電話/FAX/Eメールでお申し込みください。ご参加いただけない場合のみ、こちらからご連絡します。

場所: ㊟-㊟ 35㊟ 内・会議室など(JR根岸線「本郷台」駅前)

主催: 神奈川県立地球市民かながわプラザ 企画実施: (財)神奈川県国際交流協会

問合せ・申込先: 企画情報課 TEL: 045-896-2896 FAX: 045-896-2945 E-mail: kikaku@k-i-a.or.jp

あなたの意見を知事への提言に！

NGOかながわ国際協力会議 第3期委員を募集します

神奈川県では、国際政策の分野で活動されている県内NGOの方々、県の国際政策や県とNGOとの連携、県内NGO間の連携等について話し合い、神奈川県知事に提言するための会議として、1998年に「NGOかながわ国際協力会議」を設置いたしました。当協会は県と共にこの会議の事務局をつとめています。

この10月で第2期委員の方々の任期が終了することから、第3期委員として参加してくださる方を募集します。NGOの皆さん、ふるってご応募ください。

募集人数：10名以内

任期：2002年11月から2004年10月まで（2年間）

会議日程：年8回

応募資格：以下の条件をすべて満たす団体に所属し、所属団体の推薦を受けた方

地域の国際化、国際協力、国際交流、平和のいずれかの分野で非営利の公益活動を行っている団体
県内に事務所があるか、活動拠点が県内であるか、
又は会員の多数が県内に在住している団体

応募方法

<委員応募申込書> 氏名、住所、電話番号、生年月日、年齢、性別、所属NGOの名称、所属NGOでの役職、活動実績、応募理由等を既定の様式又は任意の書類に記入して提出

<所属団体推薦書> NGOの名称、所在地、電話番号、代表者氏名、候補者の役職、推薦理由、団体の概要・活動分野等を既定の様式又は任意の書類に記入して提出

応募締切：2002年9月13日（金）必着

選考委員会で選考の上、結果を11月初旬までに通知します。

問合せ・応募先：神奈川県県民部国際課企画班

〒231-8588 横浜市中区日本大通1

TEL：045-210-3748 FAX：045-212-2753

E-mail：kokusai@pref.kanagawa.jp

ことばと文化セミナー・料理文化講座 「韓国・朝鮮の家庭料理」

最近では随分と一般的になってきた韓国・朝鮮料理。スーパーなどで揃えられる韓国調味料を使って簡単にできる韓国・朝鮮の家庭料理をその文化背景とともに学びませんか。

日時：9月5日・12日・19日・26日・10月3日・10日の毎週木曜日
午前10時30分～午後2時

場所：アーク355 1階・料理室（JR根岸線本郷台駅徒歩3分）

募集人数：15名（先着申し込み順）

講師：権五順（クオン オスン）さん

韓国の大学で栄養学を学び、栄養士と調理師の免許を取得後、製菓会社で栄養士として勤務。4年前に来日後、横浜コリアン文化研究会などの料理教室講師などをしながら日本の調理師免許も取得。現在は東京の韓国宮廷料理店でシェフを勤めながら、韓国料理本の編集にも携わるなど韓国料理の紹介に力を入れています。

プログラム：料理を作りながら韓国の食文化について理解を深めます

| | テーマ | メニュー |
|-------|-------------------|------------------------|
| 9/5 | 夏バテを回復する韓国の健康料理 | 参鶏湯、きゅうりの酢の物、茄子の冷やしナムル |
| 9/12 | 野菜いっぱい、ビビンバとナムル | ビビンバ、もやしスープ、トマトとイカのナムル |
| 9/19 | 韓国ミニ宮廷料理 | 七節板、松の実の粥、葱の野菜巻き |
| 9/26 | 韓国の麺と肉料理 | ビビン冷麺、ブルゴギ、串焼き |
| 10/3 | *マッコリと一緒に、簡単なおつまみ | パージョン、三色ジョン、焼き海苔 |
| 10/10 | キムチを漬けてみよう | 白菜キムチ、カクテギ、ゆで豚キムチ |

*マッコリとは、米を主原料に麹で発酵させたお酒で爽やかで乳酸飲料の風味がするお酒です。

受講料：18,000円（全6回）

このほかに消費税と食料費実費（6回分6,000円）が必要となります。

問合せ・申込先：国際協力課

TEL：045-896-2964、E-mail：minsai@k-i-a.or.jp

米国・メリーランド州からの新旧英会話講師のメッセージ

神奈川県と友好提携関係にある米国・メリーランド州から英会話講師として2年間活躍いただいたメリー・エリザベス・ニッチ（愛称メンディ）さんが8月9日に帰国しました。後任の講師としてロバート・ジェイ・ゴールドさんをお迎えします。

はじめに、メンディさんからの帰国に際してのメッセージです。

Dear Friends,

"Life is a series of hellos and goodbyes, I'm afraid it's time for goodbye again." These are lyrics to a song by one of my favorite American singer/songwriters, Billy Joel. The name of the song is, "Say Goodbye to Hollywood." Well, I guess it is my turn to say goodbye to Hongodai.



It has been a fantastic two years representing Maryland as the English teacher for Kanagawa International Association. I was fortunate to be able to see so much of Japan, from Hokkaido to Okinawa. And, what fun I had! As many of you know, onsen was my special Japanese cultural project, and it was one of the best ways to get to know Japan and its people. So, I leave with these wonderful memories, and friends. The friendships are, perhaps, the best part of all.

I leave Japan in early August. I will be returning to the same job I had before leaving the United States three years ago, teaching English as a second language to immigrant children at a junior high school in Baltimore County. I am happy to be handing over my teaching position at KIA to Mr. Robert Gould. Please give him a warm welcome and enjoy your future English classes.

Warmest regards,
Mendy Nitsch

メンディさんは、2年間の滞在中、「日本文化」を学ぶプログラムとして「温泉」を研究してきました。報告書は、以下のページにありますので、ぜひご覧ください。
報告書 "Background on and Benefits of Onsen Bathing"
(英文) <http://www.k-i-a.or.jp/ts-report/>

では、10月からの英会話講座を担当するロバートさんからのメッセージです。

Dear people of Kanagawa,

My name is Robert Jay Gould; I will be working at KIA as your new English teacher. Everyone tells me Kanagawa is very beautiful and the people are very friendly. So, I'm looking forward to joining your community in September.



I was born in Maryland, February the 26th. My heritage is mixed, my father is an American and worked many years for NASA, and my mother is from an Italian family in Chile, a wonderful little country in South America.

There are many things I like, and I would like to share these things with you. My favorite foods are seafood and fruits (I particularly love strawberries). Autumn is my preferred season of the year and I would like to see the beautiful Koyo trees of Japan this fall. My favorite place is next to the water, because I like the ocean very much. My favorite colors are orange (like autumn) and blue (like the ocean). I have many hobbies, but some of them are listening to music, working with computers, fencing and soccer. I also enjoy making new friends, so if you have the chance please stop by so we can talk.

I'm very happy to be moving to Kanagawa and I want to thank you all very much for this wonderful opportunity.

Robert Jay Gould

秋期英会話講座 受講者募集

世界のこと、日本のこと、日常生活のことなどを、より多くの人たちと話せるようになることを目標に、英会話講座を開講します。神奈川県友好姉妹州の米国メリーランド州から招へいた専任講師が初級(C)から上級(A)クラスを担当します。また、今期より日本人講師による基礎(D)クラスを新設いたしました。

楽しい雰囲気の中で英会話を学びませんか。

申込み受付日時

午前・午後クラス希望の方 9月28日(土)午前10時

夜クラス希望の方 9月28日(土)午後2時

クラス分けのための簡単なテストを行ないますので、電話予約のうえ、上記日時にお越し下さい。筆記用具と受講料等をご持参下さい。申込み受付にはテストの時間を含めて約2時間がかかります。

申込み希望者が各クラスの定員を超えた場合は抽選となります。

定員に満たない場合は、追加受付を行ないますので9月29日以降にお問合せください。

対象：18歳以上の方

定員：各クラス17名(継続受講者を含みます)

費用：受講料 39,900円(消費税込み)

協会年会費 3,000円(会員の方は不要)

教材費 2,600円(上級)、2,200円(中級・初級)

*基礎クラスは、教材費は必要ありません。

費用は申込み時に一括でお支払いいただけます。

お支払いいただいた費用は、払い戻しできませんのでご了承ください。

場所：あーびるど 1階・研修室

(JR根岸線「本郷台」駅徒歩3分)

講座概要

講師：Mr. Robert Jay Gould

(メリーランド州から招へいた専任講師)

日本人講師(現在、選考中)

期間：10月12日～2003年3月11日(週1回90分、全18回)

クラス：

Aクラス(上級)

英語で社会時事全般の応用会話ができる方のクラス

Bクラス(中級)

英語で日常の簡単な受け答えができる方の日常実用会話上達を

めざすクラス

Cクラス(初級)

英語は聞き取りは少しできるが、話すのが苦手な方のクラス

Dクラス(基礎)

中学1年生くらいの英語からじっくり学びたい方のクラス

講座日程

| | 火曜日 | 水曜日 | 木曜日 | 金曜日 | 土曜日 |
|-----------------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 午前(10:30~12:00) | D(基礎) | | | | |
| 午後(13:30~15:00) | D(基礎) | C(初級) | | | A(上級) |
| 夜(18:30~20:00) | | B(中級) | A(上級) | C(初級) | |

*木曜日B(中級)クラスと金曜日A(上級)クラスは、継続受講の方で定員に達しましたので、今回、募集はいたしません。

講師紹介：ロバート・ジェイ・ゴールド

メリーランド州ボルチモア生まれの23歳。南米のチリでの生活が長く、チリ大学で分子生物工学を、メリーランド大学で生物化学を専攻。メリーランド大学では前任のメンディさんと同様に英語を母語としない人への英語教授法も学んだ。英語・スペイン語がネイティブレベル、ドイツ語が中級程度、イタリア語・フランス語・ポルトガル語・日本語が少し話せるとのこと。パソコンを組み立てたりすることが好きで工学系に強い一方、チリではボーイスカウト活動、ボルチモアでは国立水族館でボランティアガイドを務めたりと、活動的でもあります。

英会話講座・ことばと文化セミナーとも、問合せ・申込先は、国際協力課まで

TEL：045-896-2964、E-mail：minsai@k-i-a.or.jpへどうぞ

ことばと文化セミナー秋の入門・初級コースのご案内 アジア・中東・中南米の「ことば」を学んでみませんか？

入門コースは、全くの初心者の方を対象に簡単なあいさつ程度ができるようになることを目標にしています。

初級コースは、その言葉で自己紹介程度できる方を対象に基礎力の充実を目指します。

なお、受講受付は、全コースとも第2回目の講義日まで行なっています。

| 曜日 | 火曜日 | 水曜日 | 木曜日 | | 金曜日 | 土曜日 |
|------|---|-------------------|-------------------------------------|---|-------------------------|------------------------|
| 講座 | インドネシア語(初級) | インドネシア語(入門) | スペイン語(初級) | ハングル(初級) | アラビア語(入門) | タイ語(入門) |
| 内容 | インドネシア語で自己紹介程度できる方を対象 | 初めてインドネシア語を習う方を対象 | スペイン語で自己紹介程度できる方を対象 | ハングルで自己紹介程度できる方を対象 | 初めてアラビア語を習う方を対象 | 初めてタイ語を習う方を対象 |
| 講師 | 美野 幸枝さん アジア・アフリカ語学学院講師 | | アンパロ 遠藤さん 大和市民間学習センター スペイン語講師 | 金 順玉(私スリ)さん フェリス学院大学非常勤講師 横浜コリアン文化研究会代表 | 斎藤 美津子さん 慶應義塾外国語学校講師 | 中山 玲子さん 慶應義塾外国語学校講師 |
| 期間 | 9月3日～11月19日 | 9月4日～11月20日 | 8月29日～11月14日 | 8月29日～12月5日 *第4木曜は休講 | 9月6日～11月22日 | 9月7日～11月30日 |
| 時間 | 18:30～20:00 | 18:30～20:00 | 14:00～15:30 | 18:30～20:00 | 14:00～15:30 | 14:30～16:00 |
| 共通事項 | 講義時間・回数は1回90分・全12回(初回のみ120分) 教室：あーびるど 1階・研修室B 定員：15名(最小催行人数7名) 受講料：28,000円(29,400円消費税込み) *テキスト代金別途 | | | | | |

「草の根国際協力応援バザー」にご協力ください

神奈川県国際交流協会では、今年も、NGOの活動支援のためのバザーを開催します。売上げは、すべて「かながわ国際協力基金」への寄付金とし、NGO活動への助成のために使わせていただきます。皆さまのご来場をお待ちしています。

日時：12月1日（日）11:00～14:00

場所：あーぢ 3553 3階
企画展示室

入場無料

問合せ：国際協力課
TEL：045-896-2964

ボランティア募集！

神奈川県国際交流協会では、品物の仕分け・値札付け（1）や、当日の販売（2）のボランティアを募集しています。ご協力をお願いします。

- （1）11月26日（火）～11月30日（土）
1時間以上お手伝いいただける方
（2）12月1日（日）10:00～15:00

バザー用品の提供をお願いします

今回のバザーで販売する物品の寄付を募集しています。食品（保存のきくもの）、楽器、玩具、雑貨など。品物は、10月15日～11月22日の間に、神奈川県国際交流協会事務局まで持参、又は宅配便（恐れ入りますが、送料のご負担をお願いします）でお届けください。なお、古着は受け付けていませんので、ご了承ください。

研修生・留学生との交流の1日 神奈川県国際研修センター

センター・デーのお知らせ

神奈川県国際研修センターは、かながわで学ぶ研修生・留学生の宿泊研修施設。相鉄線二俣川駅、運転免許試験場のそばにあります。施設公開を兼ね、年に一度のお祭りを開きます。皆さん、どうぞおいでください！

研修生・留学生による料理教室
（10:00～12:30）

- a. 皮からつくる！中国のぎょうざ
b. つくって食べよう、
モンゴル&ウズベキスタンの料理
事前申込み制、材料費700円
各定員15名。定員になり次第締め切ります。

ミニ・バザー（12:00～）
販売する品物の寄付を募集しています。ご協力をお願いします。

ミニ・コンサート（13:00～）
社会の中の不正、自然のこと、自由に生きたいと願う人の心など、メッセージをこめたフィリピン・オルタナティブミュージックをどうぞ。

出演：アリソン・オパオン
ブッチ・アバンガン

研修生によるパフォーマンス

子どものひろば（14:00～）
韓国、中国、タイ、モンゴルなどのあそびを紹介する予定です。

留学生座談会（15:00～）

ミニ・レクチャー（15:00～）
カンボジア、ニカラグアの研修生が、現地での生活・文化を紹介します。

展示と交流のコーナー
タイや中国のお菓子をどうぞ

日時 11月10日（日）
10:00～17:00

入場 無料（料理教室のみ材料費）
会場 神奈川県国際研修センター
問合せ
料理教室申込み・バザー用品送付先
神奈川県国際研修センター
TEL: 045-366-0157
FAX: 045-366-0164
E-mail: kpito@hamakko.or.jp までどうぞ！

プログラムの内容は、一部変更になることがありますので、特に参加をご希望のものについては、事前にご確認ください。

研修生・留学生の出身国

中国、韓国、カンボジア、タイ、モンゴル、インド、ウズベキスタン、台湾、ニカラグア、フィリピン、マレーシア

神奈川県国際交流協会(KIA)は

地球のすべての人が、国境や人種、文化の違いを越えて、人間らしく暮らせる社会の実現のため、人と人とのつながりを大切にした「国際交流」「国際協力」を推進するさまざまな事業を展開しています。

あなたも会員になりませんか？

協会の活動を支える会員を募集しています。会員になると

協会が主催する各種催しや国際交流団体、NGOの催し情報、ボランティア情報を掲載した『Hello Friends』『サラダボウル』をお送りします。

会員の方を対象にした催しへご招待します。『エスニック・レストラン・マップ』をお送りします。

会員証の提示で、提携エスニック・レストランの優待サービスが受けられます。

年会費：個人 3,000円から
団体 10,000円から

*会員になりたい方は、協会までお問い合わせください。振込用紙など関係資料をお送りします。

協会が運営するあーぢ 3553内の施設の利用時間は下記のとおりです。

情報フォーラム 9:00～20:00
（土曜・日曜日・祝日 9:00～17:00）
映像ライブラリー 9:00～17:00

*月曜日は休館日です。
（ただし、祝日は開館しています。）



このほか、神奈川県国際研修センターと神奈川県国際学生会館を運営しています。

Hello friends

2002年9月6日発行
第228号

発行 財団法人 神奈川県国際交流協会
〒247-0007
横浜市栄区小菅ケ谷一丁目2番1号
神奈川県立地球市民かながわプラザ1階
045-896-2626 FAX.045-896-2945
URL: http://www.k-i-a.or.jp
E-mail: kikaku@k-i-a.or.jp
印刷 株式会社 佐藤印刷所

キヤラバン・サライ
あーすぶらさで開催された「サタコと折り鶴展」には、期間中、大勢の人が訪れ、ヒロシマで被爆し、白血病で12年の人生を閉じた佐々木禎子さんのほかならぬ人生に、涙を誘われていた。長くてもあと一年の命と聞かされた、一晩で晴れ着を縫って、「お願いだから着て見せて」と言ったお母さんの中から、同じ子を持つ親にとっては、察して余りある。折り鶴が平和の祈りを象徴するようになったのが、禎子さんが病床で折った折り鶴に由来していることも、私は初めて知った。
そして今、世界に目を転じてみると、戦争による子どもたちの悲劇は、なくなるどころか、ますます拡大、深刻化しているように思えてならない。何の責任もない幼子ともたちが、傷ついたり、命を失ったりしなければならぬのは、いつだって誰のせいなのかな。
イラクでは、先の湾岸戦争時に米軍が使用した劣化ウラン弾の影響で、奇形児や子どもたちの白血病が相次いでいるという。その国の人々がまた、アメリカによる新たな攻撃の不安にさらされている。
アフガン難民キャンプを訪ねた人が言われた、「日本は、ヒロシマや長崎を経験したにもかかわらず、なぜアメリカを支持するのか」という言葉の意味を、しっかり受け止める必要がある。
(国際協力課 木下理仁)

*キヤラバン・サライは、かつてシルクロードにあった隊商宿。文化・情報の中継点となっていました。協会職員からのメッセージ発信の場となるよう名付けました。次回の機関紙の発行は11月上旬の予定です。(Hello Friendsは奇数月に発行しています。)